総論　── 古代～高麗 ──

１．記述の構成について

古代～高麗にいたるまでの朝鮮半島にかんする教科書の記述は、全体の流れは各社ともおおよそ共通している。農耕のはじまりから古朝鮮について、漢による楽浪郡の設置、高句麗・百済・新羅の建国、加耶諸国と倭の五王、渡来人の活躍、白村江の戦い、新羅の統一、日本文化への影響、高麗の建国、元寇と高麗など多岐にわたる。全体的に、7 世紀までは非常に詳しいが、統一新羅以降、渤海、高麗についての記述は簡略である。

出版社の記述量を比較すると、日本文教出版がもっとも簡略で、最低限の内容しか記述しかしていないという印象を受ける。一方、もっとも詳細に記述しているのは扶桑社で、特に高句麗の広開土王との戦いと、唐・新羅と戦った白村江の戦いとが、出兵経緯を含め事細かに記されている。

以下、全トピックに渡って検討するのは煩雑になるので、朝鮮史との関わりで重要と思われるいくつかの論点にしぼって検討していく。

２．個別問題の検討

(1) 朝鮮半島との外交

４世紀から７世紀までの朝鮮半島との外交関係については、各社とも詳しく叙述されている。ところで、この時期に古代日本が朝鮮半島南部に侵出して支配したという「任那日本府」説は、すでに学術的には否定されている。にもかかわらず、大和朝廷が支配したと明記はしないまでも、あいまいな表現ではあるが支配力を及ぼしていたかのような表現が目立つ。そのことが最も如実にあらわれるのが「倭の五王」をめぐる記述である。倭の五王は、中国の南朝に朝貢して、倭の国王の地位と朝鮮半島南部における軍事指揮権をもつ将軍号を認めるように求めたのであって支配権を求めたわけではない。また、百済にたいする軍事指揮権については一貫して認められなかったことや、将軍号を認められたことと実際に軍事指揮権を発揮できたかは全く別問題であることをのべないと、倭が実際に朝鮮半島南部の軍事指揮権を掌握していたと誤解するおそれがある。

比較的正確に表現していると思われるのは東京書籍、帝国書院である。倭の王が中国に使者をおくった理由を、あくまで軍事的な指揮権に限定されたものであった、もしくは優位にたとうとしたものであるという表現をしている。一方、清水出版、日本書籍新社、日本文教出版は、朝鮮半島南部を支配する地位を求めたものであったという評価をするが、支配する地位というのはやや正確さに欠けるかと思われる。文章があいまいで文意のつか

みにくいのが、教育出版と扶桑社である。「朝鮮との関係」「朝鮮南部とのつながり」を保つためのものであったとするが、朝鮮半島との関係を維持するために中国に朝貢するという説明は理解しがたいのではないだろうか。

ところで、朝鮮半島南部の加耶地域について、扶桑社のみが「任那」という語を使用し、見出し語にも使用している。しかし「任那」は、現在の金海にあった金官伽耶一国のみをさす言葉と考えられ、加耶諸国の総称として使用するのは『日本書紀』のみにみられる。そのため、「任那」は、古代日本が統治の対象とした地域であるというニュアンスを含んだ表現であり、総称としては加耶が適当である。

(2) 渡来人の活躍と仏教の伝来について

朝鮮半島や中国大陸から渡来してきた人々が、さまざまな技術・文化を日本列島につたえたことについては各社とも詳しく記述している。さらに、本文だけでなく、写真、地図などを使ってどのような技術がもたらされたのか、渡来人がどの地域にいたのかを説明しているものも多い。渡来人が伝えた技術としてもっとも強調されるのは須恵器とのぼり窯で、日本書籍新社、日本文教出版、東京書籍が図を掲げている。また、日本列島と朝鮮半島において類似した冠や靴が出土していることを図で示し、視覚的に説明しているのは東京書籍、清水書院である。帝国書院では群馬町で出土した渡来人の活躍をしめす土器、墓を写真入りで紹介する。現在にのこる地名から渡来人の足跡をしめすのが教育出版と大阪書籍である。特に大阪書籍は、地図にのこる地名や遺跡などから身近な地域における渡来人の足跡を調べるという特集記事をのせている。扶桑社は渡来人の活躍に関する図版は特に載せていない。

次に仏教の伝来についてであるが、大阪書籍、教育出版、帝国書院、東京書籍、日本文教出版では、仏教・儒教を渡来人が伝えたという記述をおこなっている。しかし、実際には百済王が儒学の博士を派遣したり、あるいは仏教経典、仏像などをもたらしたのであって、渡来人が伝えた須恵器などの技術と同列に扱うのは誤りである。清水書院、日本書籍新社、扶桑社は、百済からもたらされたことを明記する。

ところで、扶桑社のみが「渡来人」という用語を使用せず、「帰化人」という表記を行っている。帰化人という言葉には､天皇の徳を慕ってきたものとする意味が含まれているため、この時代の渡来者を表す用語として不適当であるし、そのため今日では使用されない語である。教科書で使用するのに適当な用語ではない。

(3) 大宝律令の制定について

701 年の大宝律令の制定について、東京書籍、教育出版、帝国書院、日本書籍新社、清水書院、日本文教出版の各社は、唐にならって律令を制定したことをのべている。大阪書籍のみ、唐の律令を参考にしたことがかかれていない。扶桑社においては、律は唐にほぼならったものであるが、令は日本の実情に合わせたものであるという指摘をおこなっている。

そして、唐から冊封を受けていた新羅が独自の律令をもたなかったことをと比較して、独自の律令をつくった日本の姿勢を評価する。しかし、新羅においても、独自の律令自体は編纂されなかったものの、官制が唐とは異なった独自のものであったことは、日本と同様であった。律令を制定したか否かだけをもって唐から自立していたかどうかの指標とするのは、日本は中国から距離をとって独自の世界を築き、朝鮮は中国に従属して独自性をもてなかったと主張するための恣意的な選択である。

同じことは、扶桑社版の他の箇所でもみられる。律令制定につづく記述で、唐の長安と異なり平城京に城壁がなかったことを、日本の国情にあわせたものと評価している。だが、新羅の王京も城壁に囲まれていなかったのであり、新羅も唐にならいつつも独自の国家を築いたことは同様だったのである。

（4）白村江の戦いについて

白村江の戦いについての記述があるのは、清水書院、帝国書院、東京書籍、日本書籍新社、日本文教出版、扶桑社である。記述のある各社に共通しているのは、百済から救援を求められて出兵したことになっている点である。しかし、唐と新羅の連合軍によってすでに 660 年の時点で百済は滅亡したとするのが通常の理解であって、大和朝廷に救援を求めたのはあくまで百済滅亡後の復興軍である。したがって、百済から救援を求められて出兵し、白村江で敗北したことによって百済が滅亡したかのような表現は、正確さを欠く叙述である。日本の役割を過大視するものともいえよう。

また、扶桑社は、「2 日間の壮烈な戦い」「（日本の軍船が燃えて）空と海を真っ赤に染めた」などと戦いの情景を詳しく描写しているが、教科書でこのような詳しい戦いの描写をおこなう必要があるのだろうか。限られた分量のなかで、このような描写をするのはバランスを欠いているといわざるをえない。

（5）高句麗の建国

高句麗について、朝鮮、あるいは朝鮮北部で建国されたという叙述がめだつ。大阪書籍、清水出版、日本書籍新社は朝鮮北部でおこったとし、教育出版は朝鮮でおこったとする。高句麗が紀元前後ころに建国されたのは朝鮮半島北部ではなく、現在の中国東北地方であり、朝鮮で建国されてとするのはあやまった記述である。

（6）統一新羅、渤海との交渉について

遣唐使にくらべ、新羅、渤海との交渉については軽視されているといわざるをえない。新羅、渤海との交流があったことについて全く触れていないものもあり（大阪書籍、日本書籍新社、扶桑社）、言及しているものでも単に交流や使節の往来があったとひとこと述べているだけのものも多い（教育出版、清水書院、日本文教）。東京書籍は、新羅、渤海との交流については述べていないが、日本から多くの僧が唐・新羅の商船を利用して唐に

往来したことを指摘している。また、帝国書院は、使節の往来があったという単なる指摘にとどまらず、8 世紀において唐、新羅、渤海との間でどれだけの数の使者が往来したかを表にして掲げており、密接な関係があったことを分かりやすく説明している。

（7）高麗と元寇のかかわり

元寇に関しては、単に日本が元の軍勢を撃退したというだけでなく、元寇に参加していた高麗も長い間抵抗していたこと、中国、ベトナムなどでの元に対する抵抗が 3 度目の計画を頓挫させたことなど、単に日本の問題ではなく、より広い視野から接近することが望ましい叙述と思われる。

モンゴルの侵略に 30 年もの間高麗が抵抗したことについては、大阪書籍、教育出版、清水出版、帝国書院、日本書籍新社が叙述している。高麗軍の一部（三別抄）がモンゴルに抵抗して、日本にまで援軍を求めたことについては、教育出版、清水出版、日本書籍新社に記述がある。元による 3 度目の日本遠征が中国、ベトナムなどでの抵抗により頓挫したことについては、大阪書籍、清水書院に言及がある。